

されけるとぞ聞えし。

〔長門本平家物語^四〕丹波少將は、備中の國妹尾の湊、ゆく井といふ所より御船に召して、波ちはるかにこぎうかぶ。是はいよの國夏地につきてめぐられける。たかくそびえたる遠山のはるかに見えければ、あれはいづくぞと少將とひ給へば、とさのはた足摺のみさきと申ければ、少將思ひだして、さては昔理一と申そうありき、有漏の身をもて、ふだらくせんををがまんとちかひて、一千日の行をはじめて、御弟子のりけんと申一人ばかり召具して、御船にめしておし浮び給ふに、むかひ風はげしく吹きて、もとのなぎさに吹返す。理一なほ行法の功をはらざりけりとして、又百日の行法をし給て、百日過ければ、聖人元より人を具してはかなふまじとして、御船に唯一人めすかの船は、うつほ舟なり、まろきぬの帆をかけて、順風に任す。げにもおいて事をへだて、はるかにとほざかる。

〔古事記^上〕爾鹽椎神云、我爲汝命^{○火遠}。作善議、即造无間勝間之小船、載其船、以教曰、我押流其船者、差暫往、將有味御路。

〔古事記傳^{十七}〕无間勝間は、麻那志加都麻と訓べし、无間は、書紀に無目と作る意なり、^{借字}加都麻は、堅津間の約まりたるにて、書紀には、即堅間とあり、^{○註}こは籠の編る竹と竹との間の堅く密りて、目の無きを云り、^{○註}萬葉十二^{九丁、卅四丁、卅九丁}に、玉勝間とあるも、此物なり、^{○中}小船とは、此は必しも船の形に造れりとは非じ、何物にまれ乘て水を行物を、船とは云るなるべし、書紀に、以无目堅間爲浮木とあるも同じ。

〔運歩色葉集^阿〕緋小舟^{アケサヲフネ}

〔倭訓栞^{前編二}〕あけのそほぶね 萬葉集に、赤曾保舟と見えたり、そほは赭^{ソホニ}の義、丹塗をいふ也、漢土の紅船なるべし。